経済観光・港湾委員会資料
平成２２年５月２０日
港　　湾　　局

「都心臨海部・インナーハーバー整備構想」提言書について

横浜の都心臨海部・インナーハーバーについて、開港 150 周年を契機に次の 50 年（2059 年）を見据えた理想の姿の検討が横浜市インナーハーバー検討委員会で進められてきましたが、平成２２年３月２９日(月)に提言書がとりまとめられ、布施勉委員長（横浜市立大学学長）から市長に提出されました。

◆ 提言の特徴

【背景】

これからの横浜を取り巻く社会・環境の変化、価値観の変化、都市構造の転換などを踏まえ、以下のような視点からの検討が必要となります。

- 現在、横浜は少子高齢化、人口減少、地球温暖化など社会環境の変化に直面し、国際ハブ港化、羽田空港の国際化などへの対応が必要とされています。
- 豊かな海をいだく空間構造を活かしながら、東京中心からインナーハーバー地区中心のライフスタイルへと転換し、都市としての自律性を高め、豊かさと活力をもたらす成長戦略が求められています。

【基本理念】

①人間中心の都市　　②持続可能な環境
③人材・知財を活かす社会　　④文化芸術創造都市の更なる展開
⑤市民社会の実現

【将来都市構造と戦略】

- リング状の都市構造
- ５つの戦略「環境・交通・生活・産業・交流」

（ 詳しくは、別紙の提言書[概要]を御参照下さい。）

◆ 今後の取り組み

本市が年内策定を予定している「新たな中期的計画」へ提言の理念等を反映させるよう、都市整備局と連携し、調整を進め、併せて各局との施策調整を進めてまいります。

裏　面　あ　り

【参考】

◆ 提言受理時の市長コメント

- 大学連携という新しい仕組みを活用して検討されたことは、非常に価値あることで感謝しています。
- 今後は、世界で唯一無二のリング状のウォーターフロント空間や、羽田空港との近接性を活かし、国際競争力のある都市づくりや港づくりを目指します。
- 提言を契機に、長期的な都市ビジョンの議論を進めていきます。

◆ 横浜市インナーハーバー検討委員会の 委員構成 及び 検討経緯

	氏　名	所　属	開催日
◎	布施　勉	横浜市立大学学長	第１回検討委員会 平成21年7月30日
○	藤木　幸太	横浜港運協会副会長	
○	北沢　猛（※）	東京大学大学院教授	第２回検討委員会 平成21年11月27日
	梅川　智也	(財)日本交通公社研究調査部長	
	大矢　和子	株式会社資生堂常勤監査役	第１回調整部会 平成22年1月27日
	岡部　明子	千葉大学准教授	
	北山　恒	横浜国立大学大学院教授	第２回調整部会 平成22年3月10日
	近澤　弘明	中法人会会長	
	久野　敦子	セゾン文化財団 ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ･ﾃﾞｨﾚｸﾀｰ	第３回検討委員会 平成22年3月19日
	横内　憲久	日本大学教授	
	若林　朋子	企業メセナ協議会 ｼﾆｱﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑｵﾌｨｻｰ	

◎：委員長 、○：副委員長　　※平成21年12月まで

◆ 検討体制

横浜市立大学が中心となって設立された大学連携組織「大学まちづくりコンソーシアム横浜」による研究成果を資料として提供いただき、研究成果をもとに検討を行ってきました。

大学まちづくりコンソーシアム横浜とは

・横浜市立大学を中心とする５大学の連携組織。
　横浜市立大学、横浜国立大学、神奈川大学、関東学院大学、東京大学で構成。
・インナーハーバーをはじめとする横浜のまちづくりの研究を実施。

次なる50年 横浜（うみのみやこ）は海都へ

横浜市民と世界から集まる多彩な人が幸福と豊かさを実感できる都市を目指して

●現在、横浜は少子高齢化、人口減少、地球温暖化など社会環境の変化に直面し、国際ハブ港化、羽田空港の国際化などへの対応が必要とされています。

●豊かな海をいだく空間構造を活かしながら、東京中心からインナーハーバー地区中心のライフスタイルへと転換し、都市としての自律性を高め、豊かさと活力をもたらす成長戦略が求められています。

「海都（うみのみやこ）」の基本理念

市民社会の実現
・開かれた市民社会
・市民の力が生きる強力な地方政府

人材・知財を活かす社会
・創造産業や先端的な産業を支える多様な人材・知財が活きる都市

文化芸術創造都市の展開
・横浜の遺産、風景、歴史の継承と先端文化の育成
・市民一人一人が創造的になれる社会

人間中心の都市
・横浜市民や横浜を訪れる人々が、幸福と豊かさを実感できる都市

持続可能な環境
・生物多様性の維持と自然の回復、再生可能エネルギーの導入などによる、環境に配慮した持続可能な社会

●インナーハーバー地区とは

明治~大正~昭和期にかけて埋立により拡張、発展し、今では新たな都心を形成している内港地域（おおむね横浜ベイブリッジの内側でJR京浜東北線・根岸線の海側の地域）、及びその陸域で囲まれた水域を、「インナーハーバー地区」と呼んでいます。

構想が目指す将来像

50年後の横浜

●東アジアなどにおける、国を越えた都市間ネットワークの要となる

●更なる地方分権社会の中で、横浜の都市としての自律性と求心性を確立する

50年後のインナーハーバー地区

●持続可能な社会や自然環境「海」との共生のモデルゾーンとなる

●都市の活力を生む エンジンとしての役割をはたす

都心部強化事業（1965年）

現在の横浜市をかたちづくる計画がスタートしました。

1859 横浜開港・開国

1959 開港100周年

都心臨海部・インナーハーバー整備構想（2010年）

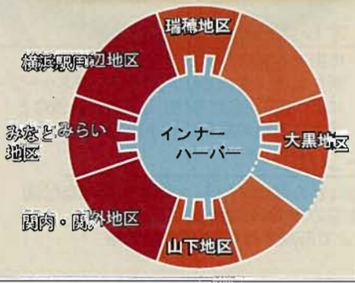
半世紀近くたった今、都心部の一体化が実現し、次なる50年のビジョンが求められています。

2009 開港150周年

2059 開港200周年

海をいだく豊かな都心空間

「海都（うみのみやこ）」の創造



これからの社会～構想の背景

社会・環境の変化
- 少子高齢化
- 人口減少
- 地球温暖化

価値観の変化
- 量から質へ
- 価値観の多様化

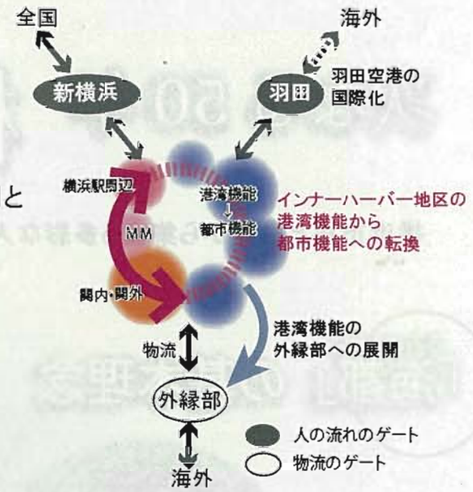
都市構造の転換
- 東京中心からインナーハーバー地区中心のライフスタイルへ
- 横浜の自律性の向上
- 郊外の活力づくり

都市構造の転換

既に始まっている横浜の取組

国際ハブ港化
港湾機能の外縁部への展開と
インナーハーバー地区の
都市機能への転換

羽田空港の国際化
立地の良さを活かした
京浜臨海部への
企業研究開発拠点の進出



横浜で進みつつある取組み

インナーハーバー地区の将来都市構造

リング状の都市
～内水面を囲む豊かな都心空間の創造～

ブルーリング
広大な水面と水際空間を最大限活用し、新しい水上交通や余暇活動など多様な活動にあふれた空間

オレンジリング
市街地を結ぶ既存の交通や道路、新たに導入されるリング状の交通ネットワークによって支えられる、生活、産業、交流など様々な活動の集積する市街地

グリーンリング
斜面緑地などの保全に加え、大学や大規模な公園、環境共生型の市街地に創出される緑などをつなぐことで形成される、外環の緑の帯

インナーハーバー地区の戦略（抜粋）

交流
都市文化を発信し、国際性豊かで多彩な人材交流の場を創る
- 地区の中心の瑞穂ふ頭には、海外の運営主体による情報発信拠点や国際的な文化・ビジネスの拠点からなる「インターナショナルパーク（仮称）」を創出
- 留学生の積極的な受け入れや大学、研究所等の連携
- 国内外に横浜の文化を発信するイベントの実施

生活
多世代・多文化の多様なライフスタイルを育む
- 市民が海に親しみ、開放的な雰囲気を楽しむことができる空間づくり
- 誰もが公共、公益サービスを受けることができる、便利な市街地
- 新しい地域コミュニティの仕組による暮らしやすさの持続

産業
研究・開発機関の立地を進め、国際的な産業発信拠点を創る
- 多様な産業の育成と国内外からの人材の受け入れ
- MICE、産業観光、 医療観光、文化体験を組み合わせた創造観光など様々な観光産業の活性化
- マリーナ機能などが住民の新たなライフスタイルに組み込まれ、魅力ある暮らしを形成

環境
持続可能な社会を実現し、多様な活動を支えるインフラを整備する
- 地域ごとの自律分散型のエネルギー利用
- 地区全体に熱エネルギーのネットワークを整備
- 豊かな海づくりと緑の保全、創造
- 地区の資源を活かした景観の形成

交通
水上交通と公共交通を中心としたシームレスな移動を実現する
- 内水面を最大限に活用する水上交通
- リング状の公共交通システム
- 超低炭素型社会を実現するための交通体系
- インナーハーバー地区外とのつながり強化